

事例研究報告

特別支援学校小学部児童に対する
要求を伝える手段を獲得するための指導

児童の実態

- 小学部児童 知的障がい
- 「ゴミ箱へポイ」「立つ」「座る」など、日常的に使われている簡単な言葉は理解している。具体物やカード（イラストや写真）の提示、指さし、身体的支援を手がかりにして、理解できる指示が増えている。
- 物を投げるのが好きで、手に持てる物は必ず投げる。また、ガタン！という音が好きで、机や椅子などを倒す。
- 他者に要求を伝える行動は、まだ見られない。6月頃、保護者より「クレーン現象なのか、親の手を引っ張って物の所に持っていく行動が見られるようになってきたが、本児が欲しい（興味がある）物というわけではなく、何を要求しているのかよく分からないことが多い」と報告があった。
- 自分の予想と違うことが起こったり、「したくない」ことを伝えたりしたときには、怒る、泣く、提示された物を押し返すなどの行動をとる。

保護者の願い

- ・ 近くにある物などを投げない。
- ・ お気に入りの遊びを見つけない。

教員の願い

- ・ 遊びを変えるときに、遊んでいた玩具を投げずに片づけることができる。
- ・ 好きな遊びを増やし、15分程度遊びコーナーで過ごすことができる。

アドバイザーからの助言

- ・ 他者に要求を伝えられるようにする。
- ・ 動作を模倣する力をつける。
- ・ 問題行動を起こす前に対応する「先まわりの対応」が重要。
- ・ 見通しをもたせる（次の活動に注意を向けさせる）。
- ・ 落ち着いているときに、いっぱい関わる。
- ・ 適切に注目をひく行動を教える・増やす。
- ・ 不適切行動に対しては反応しない。



『場面限定で、他者に要求を伝えられるようにする。』
『トークン・エコノミーシステムを活用して、動作を模倣する課題に取り組む。』

助言を受けての見直し

指導目標

『お菓子が入った容器を開けてもらうために教員に手渡すことができる。』

同時に、対面学習で動作模倣を指導する。

指導の手続き

- ・ 本児にお菓子が入った容器を渡し、各stepの距離で待つ。
- ・ 本児が容器を持って来ない場合は、「ちょうだい」のジェスチャーをする。
- ・ 動きが止まったり、戻りかけたりした時は、身体的支援を行う。
- ・ 本児が容器を教員に手渡すことができたなら、「あけようか」と言って蓋を開ける。
- ・ 1度につき6回試行し、6回全部自発的に手渡すことが2日連続でできたら、次のstepに進むこととする。

(step1) 教員が隣

(step2) 教員との距離50cm

(step3) 教員との距離1m (横や背後)

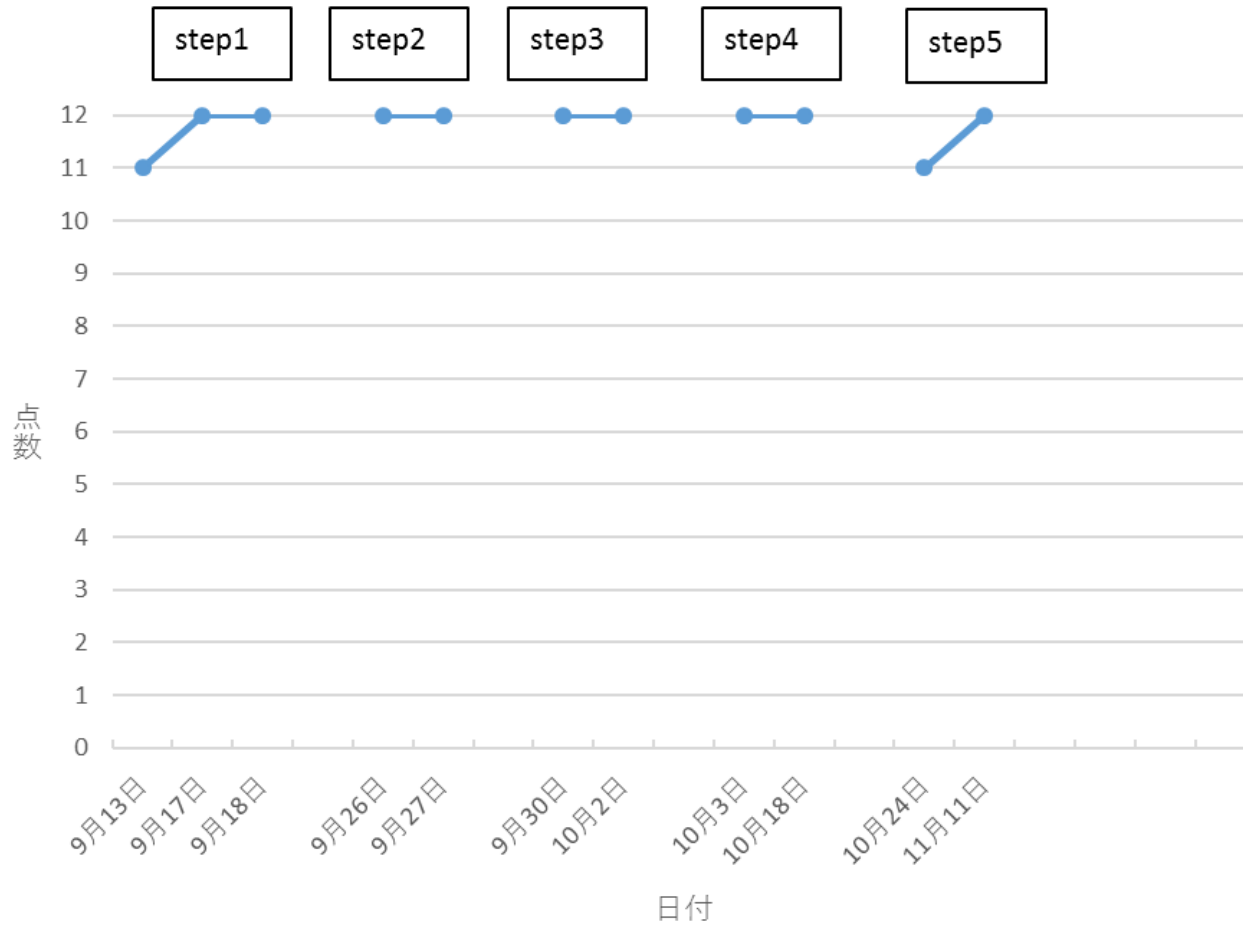
(step4) 教員との距離2m (教員の姿は見えない)

(step5) 教員との距離3～4m (教員の姿は見えない)

(step6) 対象教員が変わる

記録

教員に容器を手渡す



対面課題（動作模倣）の記録より

できるようになった動作

- ・ バイバイ（手の甲側が前）
- ・ 頭を触る
- ・ 口を触る
- ・ 拍手（手を上下に合わせて叩く）

練習中の動作

- ・ 拍手（手を左右に合わせて叩く）
- ・ バイバイ（手の平側が前）
- ・ 机を叩く
- ・ 「はじめます」の動作

指導の成果

- 教室のドアが重く，一人で閉められなかった時，担任の顔を見た。援助を求めていると考え，手伝って一緒に閉めた。
- メロディ絵本の音が鳴らないとき，投げずに絵本を持ってプレイコーナーから出てきた。
- 眼鏡を一人でかけられなかった時，担任の手をとって眼鏡の方に持っていきこうとした。
- 音楽室への移動中，エレベーターを指さした。
- 指さしするのを初めて見た。
- アンパンマンの玩具で遊んでいる時，アンパンマンの台詞の後，担任と目を合わせてニコッと笑い，手を叩いていた。

ここが成功のポイント

○スモールステップでの指導

子どものモチベーションをあげたり、
行動を定着させたりするためには
「エラーレス」が大切

○要求（動機づけ）を維持するために、
好子(お菓子, おもちゃ)を変える。

○家庭との連携

幼少期にペアレントトレーニングすることの
大切さ